

〈書評論文〉

マン・メイド・ウーマン
—— クロスドレッシングの弁証法 ——

Ciara Cremin,
*Man-Made Woman:
The Dialectics of Cross-Dressing*
(Pluto Press, 2017)

川 上 桜

1 はじめに

本稿で扱うのはニュージーランドの Auckland 大学社会学部シニア講師である Ciara Cremin の著作である。Ciara 自身は MtF トランスジェンダーのクロスドレッサーで、現在は生活の多くを女性の装いで女性として過ごしているが、男性としてパスすることも時々あり、また女装するときも女性としてパスすることは主眼としていない。彼女の主張は「自分の好きな格好を世間に対して貫く」というところにとどまるのである。また彼女の男性としての名前は Colin Cremin であるが、現在 Auckland 大学においては Ciara Cremin という女性としての名前で登録されており、本著も Ciara Cremin 名義で書かれている。したがって、本稿では著者を指す代名詞として著者の意思に沿って「彼女」を採用する。

トランスジェンダー研究を含んだジェンダー研究は現在国内外で活発に行われているが、その内実は極めて多様である。広義のトランスジェンダーの中でも、トランスセクシュアルやサードジェンダー、本著で扱われるクロスドレッサー（トランスヴェスタイト）などいくつにも分類され、それぞれの領域にまたがって自己アイデンティティを形成している場合も多くみられる。身体的性であるセックスを「トランス」しようとする／した人を

指すトランスセクシュアルの対語のような形でクロスドレッサーという概念は存在しており、「衣服を変える人」、「ジェンダー表現を変える人」という意味で用いられる。この語が指す範囲は理論上非常に広く、性別違和を持たずただ楽しみとして異性装を行う人、本著でも詳しく取り上げられている異性装に性的興奮を覚える人、トランスジェンダーである著者のように性別違和を覚えパートタイムまたはフルタイムで異性のジェンダー表現を行う人、ドラッグ⁽¹⁾をすべて包含している。実際はドラッグや職業・宗教上での異性装を除き「自発的に趣味・嗜好として異性装をする人」に対して用いることが多く、性別違和を感じている人も相当数含まれている（米沢編 2003）。彼ら彼女らは異性装にとどまり医療行為を必要としないという点で、トランスジェンダーの中でもトランスセクシュアルなどに比べて「下位」に属すると当事者の間でみなされる面があるが、クロスドレッサーという語はそのようなトランスヴェスタイトという言葉の持つ否定的な側面を当事者が拒否するために用いられるようになった言葉である（米沢編 2003）。アメリカにおいてトランスジェンダーという社会的な性が解剖学的な性と分けて考えられ始めたのは1970年代、フルタイムの異性装者であった Prince Virginia が始まりであるが、実際には1990年代のセクシュアルマイノリティ運動まで異性装（社会的性別の違和）と身体的違和の問題は「性同一性障害」の一類型として矮小化され医療の問題に押し込められてきた（筒井 2003a）。日本においては1960年代からアマチュア女装者概念が確立され、女装者やニューハーフコミュニティが存在するなど独自の背景を持ってきたが、アメリカから流入した性同一性障害の診断基準やセクシュアルマイノリティのリベレーション運動が咀嚼されずに流通している現状が見られる（米沢編 2003）。またアメリカでは異性装が長期間法的な規制や治療の対象であったため当事者による反発や社会的認識が進んでいるが、日本では異性装のジェンダー問題としての社会的認知が遅れている（筒井 2003b）。こうした現状を受けて特に国内においてはクロスドレッサーに焦点を当てた社会学的研究の蓄積は少なく（宮田・石井 2020; 石井 2017 など）、クロスドレッサー当事者によって執筆された本著を書評し内容を紹介することには一定の意義があるといえる。

本著の著者である Ciara Cremin は4歳のころから女装に強く引き付けられていたが、社会的圧力や女装で人前に出ることへの恐怖から部屋の中で異性装を楽しむにとどまっていた。しかしそれらを乗り越え、2015年、彼女が45歳の年に初めて女性の装いで職場へ赴き教壇に立った。彼女にとって異性装で他者にまなざされるという経験は大きなインパ

(1) ドラッグ（ドラッグクイーン／ドラッグキング）とは、ゲイ／レズビアンが「男／女らしくない」という偏見に対抗するため、その「男／女らしくない」というイメージを極端に誇張・風刺したもの。裾を引き摺る（drag）ほど長大華麗な衣装を身に着けていたことが語源（米沢編 2003）。

クトを持っており、こうした彼女自身の経験を通して本著のサブタイトルでもある「クロスドレッシングの弁証法」は着想された。本著は彼女自身の異性装と他者のまなごしを巡る経験を踏まえて書かれた著作としては初であり、彼女自身の自己語りや回想を多く含んでいる。著者は自身が抱いたクロスドレッシングやフェティシズムへの欲望そのものを出発点とし、フェミニズム、社会心理学、マルクス主義、精神分析理論を通して性別、アイデンティティ、「喜び」といった要素を分析の中心に据え、メディアが我々に及ぼす影響、男女の服飾の違い、広告表象、ポピュラーカルチャーによる影響など身近な事象を取り上げて分析している。本著を貫く批判的意識は社会構造へ向かい、現在の抑圧的な社会構造が崩壊し、クロスドレッシングが当たり前になった世界においては家父長制の解体が起こりひいてはポストコロナリズムの負の遺産さえも解消されているはずだと議論を展開する。本稿では以下で本の構成を紹介し、第2節で本著の議論の要点を整理し、第3節で本著の意義と限界について分析を行う。

まず第一章“*What's in a Dress*”では著者の過去の体験を多数回顧しながら各章の主題に触れ、第二章“*On the Lavatory Question*”では、フェミニズムの歴史的な議論を踏まえながら、構築されたジェンダー規範により傷ついたアイデンティティを癒す手段としてクリス・クロスドレッサー(Crisscross-Dresser)という概念の提出を行っている。第三章“*The Aesthetic of Cross Dressing*”はクロスドレッサーとしてパッシング⁽²⁾を完璧に行わない美学とそれによる家父長制の解体について論じられる。第四章“*Everyone's a Fetishist*”では、著者自身のフェティシズム的欲望を詳細に記述し、フェティシズムがもたらしうる効果をポジティブに分析している。第五章“*How a Popular Culture Made Me (a Woman)*”では、歌手プリンスのエピソードや広告表象、映画などを取り上げ、文化産業の側面から分析を加えている。第六章“*Full Exposure*”においては全体の総括と、クリス・クロスドレッサーとして人前に出ることでクロスドレッシングの弁証法が起こり得ることを述べている。

2 クロスドレッシングの弁証法

2-1 リビドー、フェティシズムと家父長的資本主義

著者は、クロスドレッシングをする原動力はあくまで「楽しさ」や「好き」という感覚

⁽²⁾ パッシング (passing) とはスティグマになり得る情報を他者に知られないように管理・操作する方途のこと (河村 2017)。

に終始し、トランスジェンダーであるから異性装をするのではないと強調する。著者はこうした感情によって人間の衝動や生活は基本的に動機づけられているという Sigmund Freud の理論を援用し、「楽しみ」を人間の本質的欲求であるとみなす。しかし家父長的社会の圧力の下ではクロスドレッシングをすることは当人たちの「好き」といった気持ちを超えて、嫌悪感を覚えられ実際に暴力の対象とされたり、犯罪行為に結び付けられることもある。クロスドレッシングにはフェティッシュ的要素やリビドー⁽³⁾的要素が含まれる場合があるためある程度の社会的な反感は想定できるが、しかし著者は、自らを掻き立てるフェティシズムの欲望がなぜそれほどまでに嫌悪されるのか、またそういった社会的抑圧から当事者さえも自らの嗜好を恥ずべき秘めるべきことだと思込まされているのはなぜなのかと問うのである。

クロスドレッサーたちを抑圧しているのは、当人たちの家族でもなければ実際に嫌悪感をむき出しにしてくる人々でもない。そうした人々も同じように、生まれ落ちた瞬間からジェンダー規範を刷り込まれ、それに合致する自己アイデンティティを得てただ実践しているだけなのである。果たして、抑圧のありかはそういった人々を育て上げる社会構造にあり、その根幹には家父長的資本主義のイデオロギーが存在すると著者は指摘する。

しかし厄介なことに、人々のリビドーやフェティシズムを育む土壌を提供し、ジェンダーに囚われない生き方・表現をする象徴的存在（著者にとっての歌手のプリンス）を伝達するのも家父長的資本主義の下で機能する文化産業である。家父長的資本主義を基盤にした文化産業は社会のあらゆる場所に根を張り、我々の生活におけるあらゆるものを商品化している。著者が心酔したプリンス自身、文化産業を通じて自身の既存の枠組みに囚われないジェンダーの在り方を表現した一方で文化産業そのものによって抑圧・搾取されていた。文化産業はプリンスによる既存の家父長的資本主義を否定するようなパフォーマンスすらも商品として利用するというしなやかで強大な力を持っている。

こうした資本主義社会が提供する商品を買うという行為は、資本主義の解体どころか強化をもたらす。著者が好む真っ赤なディオールの口紅やチラチラ光るストッキングを手に入れるためには、それらを購入する必要がある。つまり、当事者たちのリビドーやフェティシズムを満たすためには、当事者たちを抑圧する根本の原因である家父長的資本主義の生み出した商品を購入しなければならない、つまり家父長的資本主義の再生産に手を貸さなければならないのだ。

⁽³⁾ リビドーとは、Sigmund Freud をはじめとする精神分析学から生じた用語で、人間に基本的に備わった性的衝動に関わる精神状態を指す（Graziottin 2000）。

さらに、我々は逃れがたく資本主義と結びついた世界に生きているため、日々の生活の中で無意識のうちに様々な商品広告やニュース、その他の表象に接することで文化産業と接触し、新たな欲望を見つけてしまう。このように複雑に絡まった家父長的資本主義の鎖を我々はどのように解くことができるだろうか。

2-2 Crisscross-Dresser

著者が提唱するクリス・クロスドレッシングという概念は、人は必ずしも常に一つのジェンダーを貫く必要はないという考えを下敷きにした、社会的必要や好みに応じてクロスドレッシングを行う在り方である。クリス・クロスドレッサーは、自らが完全な男／女にならないことを受け入れ、むしろそれを称揚することで喜びを得る存在として説明されている。著者はクリス・クロスドレッシングに絡めていくつかの主張を行っているが、中でも特徴的な点として、リビドーやフェティシズムを肯定的に捉えている点、男性／女性の間を揺れながら状況によってジェンダー表現を変える柔軟な性の在り方を呈示している点、「装い」に重きを置いている点が挙げられる。

また著者は、クリス・クロスドレッシングは一種のアイデンティティ・イリゲーションであると述べる。アイデンティティ・イリゲーションとは、社会に生まれ落ちた瞬間から社会的に構築され刷り込まれるジェンダー観と、本来の望みとは異なる「男らしい」装いを繰り返すことで蓄積した鬱屈とした感覚が解放されることを指す。精神の洗濯とでもいうべき行為であり、自らが望む姿で他者にまなざされることに重要な意味があるという。他者にまなざされることで、自己の意識に亀裂が走り、自己アイデンティティに揺らぎが起こる。これは部屋の中で一人異性装をしている場合には起こりえず、時にそうした揺らぎは苦しいものではあるが、それによって自己の中で社会的に構築されたものと自分自身の望みの境界が判別できるようになり、それまで個々の内部に抑圧されていた「女性らしさ」をさらに解放させることが可能になるのだ。

2-3 クロスドレッシングの弁証法

先にも述べたように、クロスドレッサーたちは街に出ると人びとから嫌悪の目で見られることが少なからずあり、著者自身も暴力の対象になりかけたことがあるという。クロスドレッシングがそれをまなざす（ジェンダー規範を強固に内面化している）人びとに認知的不協和を引き起こすため、不快感や嫌悪感が湧き上がるが、それを個人レベルにとどめず社会全体の認知システムの破壊に繋げるべきだと著者は主張する。しかし前項で確認したように、家父長的資本主義ひいては文化産業の商業化の力は強大である。この強大な敵

にどのように立ち向かえばよいのだろうか。著者は、まず目の前の個々人に内在化された家父長主義的秩序を揺るがすことが重要であり、その役割はクロスドレッサーたちが担えると述べる。そうした草の根的な認識の転換が進むにつれて、家族、学校、職場、刑務所、軍事組織、そして文化産業といった既存の制度の徹底的な解体が生じ、ジェンダー、セックス、セクシュアリティ等の言葉から文化的な意味をはぎとるという目的に至るまで、リビドー的表現をするための障害となっている抑圧の分解が必然的に起こるのである。そしてその最終目標として著者自身もユートピア的であると前置きしているが、著者は私有財産制の廃止と、セックスに基づいた区別が無い社会を志向している。

3 クロスドレッシングの弁証法から見る社会変革の可能性

第3節では第2節で紹介した著者の論点を踏まえたうえで著者の主張の再検討と分析を行う。著者はクロスドレッシング愛好者と他者のまなざしとの交錯が既存のジェンダー規範を揺るがし、社会変革につながると述べている。しかし現実的に考えるとその見解はやや楽観的ではないだろうか。

著者自身はトランスジェンダーであり、本著ではそうした人々をメインに分析しているが、実際は単純に異性装というファッション面でのみクロスドレッシングを取り入れている人もいるため、状況はより複雑である。クロスドレッサーと一口に言っても、その内実はあまりに多様であり、社会的に抱えている生きづらさの種類も異なることは容易に想像がつく。たとえばトイレや銭湯などでは、クロスドレッサーのトランス女性が女性用の使用を望むかもしれない一方でクロスドレッサーであり性自認が男性のひとは男性用の使用を望むかもしれない。しかしだからといってジェンダーフリーのトイレや銭湯を設置すればすべて解決するわけではない（実際、著者はジェンダーフリーのトイレに対してネガティブな感覚を得たという）。見た目ではその人の性に関するアイデンティティを判断できなくなるといって社会的制度の構築は難しく、著者が理想とするジェンダーやクロスドレッサーという概念の消失した状態が常態化するまでは、個々人が望む在り方が社会的に認められないという暴力的状況が発生することも考えられる。いずれにせよ男女二元論は極めて強固に人びとの意識に刷り込まれているものであるため、即座の解決は困難であり、すべては漸進的に進めるしかないことは間違いなさそうだ。

さて、こうした社会変革を起こすには我々自身の抱える既存のジェンダーやクロスドレッシングへの規範意識を変革する必要があることは著書が主張するとおりであるが、ここには根深い構造的問題が潜んでいることが著者の一部の発言からも読み取れる。本文中

では「女性クロスドレッサーは（歴史的に）病理的説明の欠如が顕著であり、問題は男性の場合に伴うと思われる」（p.92.）という発言がなされるなど、表面的かつやや暴力的ともいえる発言が散見された。それは masculinity という既存の規範のなかでより「劣位」にあるとされる女性に「去勢」しようとする試みであるため、トランスジェンダーであるとはいえ男性として育てられその価値観を少なからず内面化した自己の葛藤として、また社会的関係の面で様々なジレンマを抱えるというのが著者の説明である。しかし女性クロスドレッサーへの歴史的な病理的説明の欠如は、女性が周縁化されてきたことの象徴と捉える視点を忘れるべきではないだろう。本稿の冒頭でも述べたように本著は MtF トランスジェンダーであり大学教員という社会的地位を確立した著者の体験をベースに議論されているため、著者以外の視点が脱落していることは否めない。女性の視点やフェミニズム運動については理論的な枠組みや指導者たちの思想に触れられてはいるが、個々人の体験やそれを取り巻く社会構造については、本著の趣旨を十分に考慮すれば理解可能ではあるものの、クロスドレッサー内部の多様性が捨象されていると言わざるを得ない。クロスドレッサーであることはその人を構成する要素の一部であり、そうした人々を取り巻く経済的環境や社会的地位、社会的アイデンティティの確立、周囲の人々の存在、個人的経験の蓄積など様々な要素が絡み合って個別の状況が生み出されていることは、本文ではほぼ述べられていないが重要なポイントであろう。著者によるやや大雑把な議論から「誰が一番大変なのか」（＝誰が一番偉いのか）という望ましくない階級的な認識が生じる可能性や、既存のジェンダー秩序の強化という側面すら感じ、米沢泉美が論じるトランスジェンダー間の優劣問題が思い起こされた（米沢編 2003）。また、こうした優劣問題・階層問題についてはクロスドレッサー内部にも同じような現象が起こり得るとも考えられる。つまり、性転換等の医療を必要としないトランスジェンダーが医療を必要とするトランスジェンダーより劣位とみなされる場合のように、部屋の中でこっそりと自らを開放するクロスドレッサーが、他者のまなざしの下に現れるクロスドレッサーよりも劣っているとみなされる可能性である。著者による社会変革のためのエンパワメントは、人前に出ることを躊躇ったりそれを望まないクロスドレッサーへの抑圧にもなりうることに留意する必要がある。

本著は、MtF クロスドレッサーである大学教員の経験に引き寄せた詳細な記述として新たな知見を示しつつもクロスドレッサー内部の多様性を示せず、人前での嗜好を開放した異性装の奨励という表面的な主張にとどまったところに限界があるだろう。しかしこうした試みの中で一貫して新規の視点であり続けるのは、著者が強く主張している「クロスドレッシングが『好き』であるからする」という感覚である。リビドーと分かちがたく結びついているために、家父長的社会において拒絶されがちであることは想像に難くないが、

あくまで個人的な喜びをベースにしていることは、他の政治的変革を起こすことを目的とした運動に比べて、安定感とゆとりを残した連帯を想定できる。他者のまなざしを揺るがすことが主眼にならず、あくまで好きな装いをする副次的な産物として他者のまなざしの揺らぎがもたらされるという意味で、従来の社会変革とは全く異なった、ジェンダーの流動性を認めるという目標と親和性の高い形態で進む運動が可能となり、そういった運動が今も世界中でミクロに展開されているということはいえるだろう。

参考文献

- Graziottin, Alessandra, 2000, "Libido: the biologic scenario," *Maturitas*, 34 (1): S9-S16.
- 石井由香理, 2017, 「トランスジェンダーとクロスドレッサーの性の商業化と現状について」『人文学報』513 (1): 11-35.
- 河村裕樹, 2017, 「『普通であること』の呈示実践としてのパッシング——ガーフィケルのパッシング論理を再考する」『現代社会学理論研究』11: 42-54.
- 宮田りりい・石井由香理, 2020, 「クロスドレッシング・アウトロー——交流イベントの成立と女装者たちの自己語り」『社会学評論』71 (2): 266-80.
- Prince, Virginia, 1997, "Seventy Years in the Trenches of the Gender Wars," Bonnie Bullough, Vern L. Bullough and James Elias eds., *Gender Blending*, New York: Prometheus Books, 469-76.
- 筒井真樹子, 2003a, 「ヴァージニア・プリンスとトランスジェンダー」米沢泉美編『トランスジェンダリズム宣言』社会批評社, 130-139.
- , 2003b, 「アメリカのトランスジェンダー・アイデンティティ」米沢泉美編『トランスジェンダリズム宣言』社会批評社, 140-155.
- 米沢泉美編, 2003, 『トランスジェンダリズム宣言』社会批評社.

(かわかみ さくら・修士課程)